

イ病資料館における小学生の学習の状況

富山県立イタイイタイ病資料館 鏡 森 定 信

I. はじめに

イタイイタイ病（イ病）資料館は三井金属鉱業神岡鉱業所から排出されたカドミウム（Cd）によって汚染された地域のほぼ東端の富山市新保地区で平成24年4月29日に開館した。同じくCd汚染地域ですでに開館していた健康パークの一角の元伝統医学センターの2階建ての建屋を改修して、1階は資料展示、2階は資料閲覧と学習・研修に利用している。資料展示に関しては、

- ① イ病をしっかりと伝え、その教訓を未来へつなぐ、
- ② 子どもや外国の人たちにもわかりやすく、

を方針としている。今回は、開館から約3年を経た時点での小学生の学習の状況を報告する。

II. 資料館の概要と小学生（団体）の利用への取り組み

1階では、昔の暮らし、被害の発生から現在までの動きを時間の流れに沿って展示している。具体には、

- ① 神通川とともにあった暮らしの原風景
- ② イ病の発生と被害の実態
- ③ 原因究明、健康と暮らしを守る動き
- ④ 流域住民の健康を守り、患者を救う
- ⑤ 美しい水と大地を取り戻してきた環境被害対策

の5つの展示コーナーからなっている。

小学5年生が興味を覚え理解できるようにジオ

ラマ、音声ガイド、ワークシートなどの工夫を行っている。2階は、15分間でイ病被害の歴史の概容を理解できるガイダンス映像、語り部講話などに主に利用している。

小学生の利用では、公害の学習が行われる5年生の学校単位での来館が主要な部分を占めている。団体での利用の場合は、まずガイダンス映像を視聴し、次いで展示について解説員の説明（通常45分程度）を受け、最後に語り部講話を聴いて感想文を書いて終了する合計90分余りのコースをモデルとしている。

帰校後に学習発表や文集・新聞作成などが行われており、その成果物は当館の資料閲覧室で展示するだけでなく、当館で主催するイ病県民フォーラムでその一部を発表してもらっている。

県内の小学校に対しては、校長会での説明と利用依頼、5年生全員にイ病を解説した副読本（よみがえった美しい水と豊かな大地）を毎年配布している。無料送迎バスや資料館での学習メニューについては広報に加え、学校に出向いてそれらの紹介と来館の勧誘も行っている。

なお、夏休みには、自由研究講座「イ病を学ぼう」と元汚染田や神岡鉱山の見学を取り入れた「イ病を学ぶ日帰りバスツアー」を学童と保護者を対象に行っている。また、教員を対象に年一回、イ病に関する教育について研修会を行っている。教員の皆さんの手によるイ病を教材とした公開モデル授業など自主的な取り組みも始まっている。

III. 小学校の利用の状況

年間3万人の来館者を目標としており、平成24年度、平成25年度はその目標が達成されている。

平成27年1月末で来館者は96,393人となっている。団体利用は846団体の27,450人（全体の28%）で、そのなかで小学生は10,467人（38%）を占めていた。その他の生徒学生では、中学生1,497人（6%）、高校生512人（2%）、大学生1,273人（5%）であった（図1参照）。

開館後一度でも来館した県内の小学校は99校で県内の全192校の51%であった。県内の東部と西部別にみると、本資料館のある富山市を含む県東部の呉東では62校（全117校の53%）、県西部の呉西では37校（全75校の49%）であった。

行政区別では、小学校10校未満の呉西のT市のように全校が1回は来館していた地域（来館率100%）から県の東西両端の郡、市のように来館

率25%の地区にまで分布していた。

また、来館回数別にみると、来館1回は、52校（53%）、2回は34校（34%）、3回は13校（13%）であった（図2参照）。

無料の送迎バスの利用は3年目で急増し、24年度は来館した小学校50校のうち27校（54%）、25年度は64校のうち36校（56%）と半数余りであったのに比べ、26年度は予定も含めて57校のうち40校（70%）に達した（図3参照）。

IV. 小学生の学習の状況

小学校ではイ病資料館に来館する前にイ病の副読本などで事前学習が行われている。本館では見学終了時に氏名は自由記入のアンケート調査を行って、学習状況を調査している。

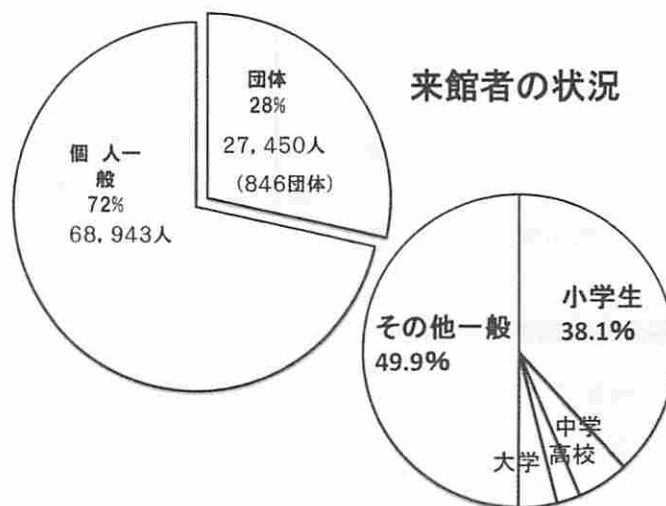


図1. 平成24年4月29日から平成27年1月31日までの来館者人数と特性

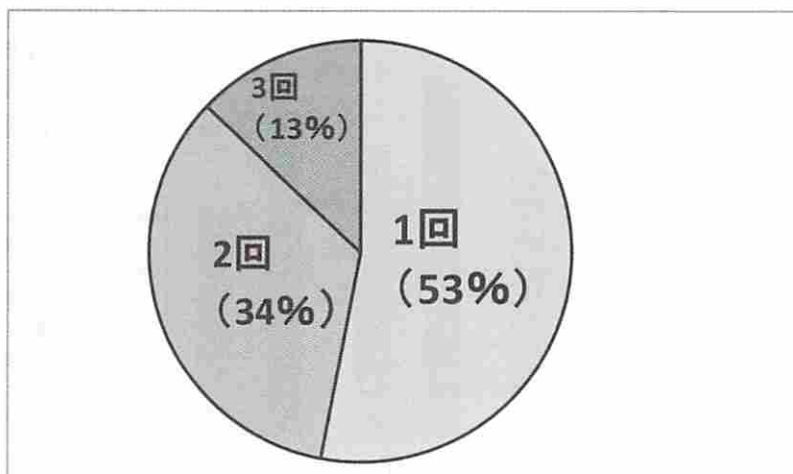


図2. 小学校の来館回数別分布

そのなかの、イ病被害の発生時期、発生した地域、被害者の症状や特徴、被害の原因（物質）に関して、事前に習得していたものの割合を表1と図4に示した。

なお、これら4事項に関する習得は見学終了時にはいずれもほぼ100%に達している。

また、来館して解説員の説明を受けた5つの展示コーナーの主題ごとに、見学終了時にその理解度を同じくアンケート調査した結果を表2に示した

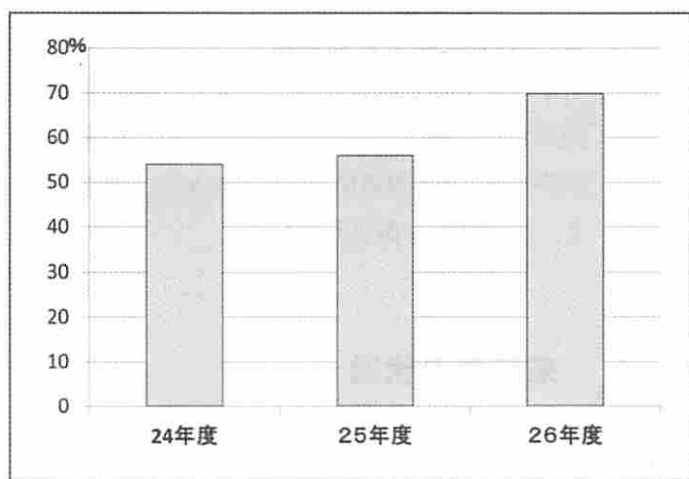


図3. 無料の送迎バスを利用した小学校の割合 (%)

(対象は表1と同じ)。

各年度とも「理解できなかった」と回答した者の割合は以下の項目で9～26%で比較的多かった。それらは、コーナ③ 原因究明と裁判の「裁判を起こした理由とその結果」と「住民と原因企業の裁判後の取り決めの内容」、コーナ④ 被害者の認定と健康の「被害者の認定方法と被害者数」と「被害者の腎臓の状態」、コーナ⑤ 被害の防止と回復の「鉱山の立ち入り調査の内容と歴史」と「農地の土壌復元の内容と歴史」であった。

見学終了時に自由記載された事項のなかで「よく分からなかった」との記載が多かったのは、「イ病被害者がほとんど女性の理由」であった。一方、印象に残ったものとしては、「正常の大腿骨模型と骨粗鬆症の大腿骨模型を手にとってみての重さの違い」であった。なお、展示以外では、イ病被害者の苦難の体験史が語られた「語り部講話」から受けた衝撃と啓示に関する記載であった。

表1. イ病資料館来館前の習得状況 (%)

年度	発生時期	発生地域	症状や特徴	原因物質	調査対象
24	47%	78%	78%	71%	小学生 1,606人
25	22%	52%	59%	45%	小学生 2,175人
26	24%	59%	63%	50%	小学生 1,530人

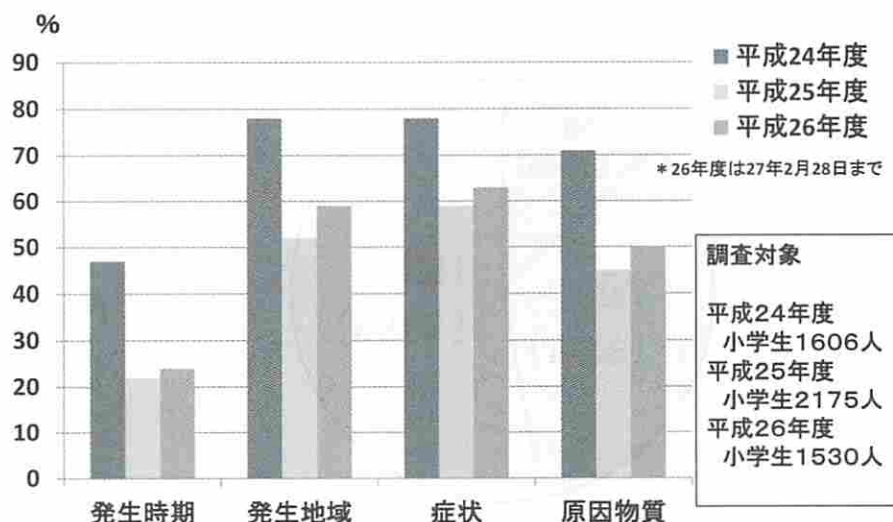


図4. イ病の習得事項別に見た来館時に既知であった者の割合 (対象は表1に同じ)

表2. 見学後の各コーナーの学習課題別の「理解できなかった」と回答した者の割合 (%)

展示コーナー	各コーナーの学習課題と総括	24年	25年	26年
① 神通川と昔の生活	川水を利用していた昔の生活	1	2	2
② イ病発生と被害の実態	被害が発生した時期	9	10	11
	被害が発生した地域	4	4	4
	被害者の症状や特徴	2	3	3
	被害者・家族の苦しみ、地域の人々の苦労	2	2	2
③ 原因究明と裁判	原因（物質）	2	3	4
	裁判を起こした理由とその結果	10	12	12
	裁判後の住民と原因企業の取り決めの内容	27	26	25
④ 被害者の認定と健康	被害者の認定方法と被害者数	20	20	24
	被害者の腎臓の状態	28	25	24
	被害者の骨の状態	2	2	2
⑤ 被害の防止と回復	鉱山の立ち入り調査の内容と歴史	23	24	22
	農地の土壌復元の内容と歴史	15	20	18
⑥ 総括	公害の恐ろしさ、環境と健康の大切さ	1	2	2

V. 考察とまとめ

小学校5年生の公害教育と連携してイ病資料館の事業を展開するために、県内の小学校5年生全員に学校を通じて副読本を配布するとともに、学校ならびに教員の皆さんにも働きかけを行った。その際、副読本の編集を担当した富山国際大学子ども育成学部水上義行教授は、「子どもの問いに答える教育」とすべく、表3に示すような副読本作成時の着眼点をあげている。

イ病資料館では、これらの問いに答えるべく、ガイダンス映像の視聴、イ病資料館の展示とその解説、語り部講話などで対応してきた。アンケート調査の回答を見ると、イ病の発生や地域そしてその悲惨さや原因については来館によってほぼ全員が理解したことはうかがえた。今回の調査の対象

とした小学校の団体での来館では、これらの事項が中心となる語り部講話をおおむね聞いており、そのためこれらの事項についての理解が一層浸透したものと思われる。一方、裁判後に取り組まれたイ病の被害者救済やCd汚染地の復元、さらには再発防止に関する取り組みでは、10～25%の割合で「理解できなかった」との回答があり、今後の課題である。

アンケートとは別の自由記載の感想文では、「被害の大きさに驚いた!」、「胸を打たれた!」、「環境を大切にしたい!」などの記載が多い。また、アンケートでも総括の「公害の恐ろしさ、環境と健康の大切さ」については、ほとんどが理解できたと回答していた。これらを副読本に盛り込まれた問いの8.「わたしたちはこれからどうし

表3. 子どもの問いに答える「イ病の副読本」として水上教授があげた着眼点

1. 「えーっ イタイイタイ病で苦しんだって、どういうこと？」
2. 「なんとか、とめることはできなかったのかしら？」
3. 「どうしてまわりの人は差別するの？」
4. 「裁判を起こすって、すごい勇気が必要だと思うわ？」
5. 「カドミウムはどうやって、人の体を悪くしてしまうの？」
6. 「イタイイタイ病かどうかは、どうやって決めるの？」
7. 「汚れてしまった水と大地はきれいになるの？」
8. 「わたしたちはこれからどうしたらいいの？」

たらしいの？」につなぐためには、資料館として
もどのような支援ができるか課題である。

公害資料館における子どもたちの学びについて
は、水俣市立水俣病資料館が長い歴史を有してい
る。年間約5万人となった来館者のうち2万人程
度が小学生、1万人程度が中学生と半数以上が児
童生徒で占められている（平成25年度）。これに
は熊本県が全学校での水俣病の教育を指示してい
ることが大きくかかわっている。また、水俣市で
も独自の取り組みがなされている。水俣市教育委
員会の「水俣市環境学習資料集 ～郷土水俣を誇
れる子どもを育成する学習プログラム～」では、
中学校卒業までに最終的に育てたい児童生徒像と
して、① 水俣病についての正しい認識に基づき、
環境モデル都市として取り組みをすすめる、②
水俣市の姿を理解し、将来にわたって郷土水俣を
誇る児童生徒、の2点が明記されている。この
方針に沿って、小学校低学年では、水俣病に関す
る基本的な理解、小学校高学年ではその整理・統
合（認識）、中学校では他の環境分野への広がり
に繋がる教育が、語り部講話など被害を受けた患
者さんとの交流を基本に進められている。基本的
には全校で教材学習や資料館訪問などの取り組み
を学年の進行を勘案しながら行われている。

新潟水俣病の「新潟県立環境と人間のふれあい
館」では、年間来館者が約4万人までに増加して

おり、その主要な来館者はやはり児童生徒である。
これには新潟県の学校教育で、水俣病の学習が唱
導されていることも大きく関与していると思われ
る。ここでは、近年、新潟水俣病とのかかわりで、
差別と偏見という今日の社会的課題の学習に力を
入れており、熊本水俣病との児童生徒の相互交流
を取り入れるなど理解を深める努力がなされてい
る。

資料館開設準備期間中に行った「利用意向調査」
によれば、県下の全小学校199校のうち119校
(59.8%、内訳、利用する33校；16.6%、送迎や
交通費に対する助成があれば利用する86校；43.2
%)が利用したいと回答していた。実際には、イ
病資料館開館後3年間で県内の小学校のうち約半
数が1度は来館していた。

イ病資料館で語り部講話を聴いた小学生の多く
は、悲惨な被害の状況に胸打たれ、このような悲
惨な歴史を繰り返してはいけないという語り部の
主張にうなずいている。地元で起きたイ病の講話
を通じて同情から共感のプロセスを体験した小学
生のその後に期待したい。

開館から3年間にわたって子どもたちの未来に
つながることを願って行ってきたイ病の学習支援
の活動について報告した。

謝 辞

今回報告したイ病資料館での小学生への学習支
援活動に対してご理解とご協力・ご支援をいただ
いた学校・教職員、保護者、語り部、解説ボラン
ティア、イ病対策協議会、三井金属神岡鉱業、関
係者の皆様に深く感謝申し上げます。

(平成27年2月25日記)